

【 社会科 】

育成したい「思考力」

- a** 社会的事象について、自己の既有経験に基づく事実や時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を、比較・類別して特色を捉えたり、関係づけて意味や価値を捉えたりする力
- b** aで捉えた意味や価値を再構成する力

社会科では、現実社会を理解し、公民としての資質・能力の基礎を養うことをねらっている。そのためには、既存の経験に基づく事実や時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を比較・類別したり、関係づけたりすることで、それぞれの社会的事象の目に見える部分を知るだけでなく、事象の意味や価値という見えない部分を理解していく必要がある。また、そうして得た意味や価値について子ども自身が総合的に判断し、解釈を描き直す必要がある。この過程で働くのが上記の「思考力」である。

- a** 社会的事象について、自己の既有経験に基づく事実や時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を、比較・類別して特色を捉えたり、関係づけて意味や価値を捉えたりする力
社会的事象について考えていく際には、生活経験を振り返ったり、視野を広げたりすることで得た事実が基となる。視野を広げるとは、時間的・空間的視野や立場を広げ、時期や時間の経過、位置や空間的な広がり、人々の相互関係に着目していくことである。具体的には、時間軸を広げて「昔はどうだったか」を調べたり、空間軸を広げて「他地域ではどうか」と情報を集めたり、立場を広げて「生産者は何をしているのか」を探ったりすることである。

(1) 比較・類別し、特色を捉える力

「比較・類別し、特色を捉える」とは、対象となる事象は、他とどこが同じで何が異なるのか、どのような観点で分類できるのか、といった事象そのものの特色を捉えることである。具体的には、事象の目に見える部分を丹念に調べ、事象を構成する事実や関連する事実を比べたり、仲間分けしたりすることを通して、1つの、または複数の事象の特色を明らかにすることを指す。その際には、それぞれの事実が子どもの経験と結び付いていることに留意する必要がある。以下に実践例を紹介する。

第3学年「公共施設は何するところ - 市役所の働き -」

【本単元で育成したい「思考力」】

市役所の仕事について、見学を通して得た事実を類別したり、他の公共施設の仕事と比較したりして特色を明らかにし、時間的・空間的視野や立場を広げながら市民の生活と関係づけ、その価値を捉える力

市役所の働きの特色を捉える場合、まず、子どもたちは見学や聞き取りによって、市役所で働く人がしているさまざまな仕事を見つけていった。そして、その複数の仕事はどれも市民のために行われているという共通性に気付き、それを観点として他にも当てはまる事実はないかと分析していった。さらに、市役所で働く人の仕事を、図書館等の他の公共施設の仕事と比較することによって、市役所の仕事は市民の生活に広く関係があることを明らかにしていった。このように市役所の仕事は、すべての市民のために行われているという特色を捉えていった。



【付箋で仕事を分類】

(2) 事象相互を関係づけ、その意味や価値を捉える力

「事象相互を関係づける」とは、ある社会的事象と別の社会的事象を「原因と結果」等の関係でつないで考えていくことである。具体的には、事実である「結果」について「なぜそうなっているのか」の「原因」を考えることである。「その意味や価値を捉える」とは、こうした事象の機能、影響等を明らかにすることであり、具体的には産業が国民生活に果たす役割を捉えたり、情報化が国民生活に及ぼす影響を捉えたりすることである。以下に、空間を広げて得た事実を基に、価値を捉えていった実践例を紹介する。

第4学年「過疎の島はつながりを求めた - 企業の島からアートの島へ -」

【本単元で育成したい「思考力」】

直島の自然や文化、産業等について、時間的・空間的視野や立場を広げ、得た事実を相互に関係づけることで、多くの観光客が島を訪れる理由やアートの島を目指す取り組みの価値を捉える力

校外学習で訪れた直島に、たくさんの観光客がいたことに疑問をもった子どもたちは、直島で何が行われているのかを調べた。そして、観光客が増えている理由を探っていた子どもたちは、地中美術館等の有名な建物が、観光地区にあることを知った。自分たちが見てきたアート作品がどこにあったのかを地図を使って確認し、それらは観光地区ではなく文教地区に多いことを理解した。子どもたちは、地図を使って観光地区から文教地区に空間的視野を広げることで、アート作品が島の一部だけでなく、住民の居住範囲にまで広がっている様子を捉え、アートの島を目指す取り組みに、島の住民が参加しているという価値を捉えていった。



【直島3分割案】

b aで捉えた意味や価値を再構成する力

「再構成する」とは、子どもが既習事項や生活経験から得た事実を関係づけて捉えた意味や価値を修正したり、より妥当性が高くなるように組み替えたりすることである。具体的には、1つの立場から捉えた社会的事象の意味や価値を、経済や心情的な視点から見直したり、複数の立場や意見を踏まえて吟味したりすることである。以下に実践例を紹介する。

第6学年「安住の地を求めて - 難民問題を通して見える世界と日本の役割 -」

【本単元で育成したい「思考力」】

難民に関するさまざまな活動を調べ、時間的・空間的視野や立場を広げながら難民発生の経緯や避難生活の様子等と関係づけ、その活動の意味や影響、関係する人々の思いを捉え、世界平和についての解釈を再構成する力

平和な状態を当たり前と捉えている子どもたちが、現在の世界情勢を正しく理解するため、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を中心に、難民を救う活動について調べていった。UNHCRと連携して支援を行う民間企業とそれを待つ難民の様子を関係づけ、難民支援の価値を捉えていった。さらに、難民生活の変化や、自らの苦難を顧みず働く人々の「命を救いたい」「安心してほしい」という思いや願いから、難民のおかれた状態とそれを解決しようとする人々の営みを知り、世界の人々が共につながっていることを捉えていった。そして、世界平和は各国や諸機関が個々に支援することで保たれるだけではなく、それぞれが役割を果たし協力していかなければ実現しないものであると、解釈をより妥当性の高いものへと描き直していった。



【思いや願いに迫る話し合い】